

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会 統一見解及び会長コメント

平成4年10月16日

気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

雲仙岳では、8月10日頃から第8ドームが成長を始め、第5ドーム付近の隆起も依然として続いている。8月の航空写真測量によれば総噴出量は約1億1千 m^3 に達し、4月から8月までの1日あたりの噴出量は約14万 m^3 となり、昨年約30万 m^3 の半分程度であった。溶岩ドームの崩落による火砕流は引き続き多数発生しており、赤松谷方向を主とし、水無川、おしが谷にも流下している。8月8日、9月27日及び10月10日には赤松谷方向を中心に火砕流が4km程流下し、8月8日には家屋被害があった。また8月下旬及び10月3日には水無川を北上木場まで達する火砕流があった。また、降雨による土石流もしばしば発生した。

山頂部の地震活動は増減を繰り返しつつも長期にわたって活発に続いている。震源は溶岩ドーム及びその直下に集中しており、以前に比べ特に変化は見られない。普賢岳北山腹及び南山腹における距離測量では、依然として縮みが続いているが、その変化は次第に鈍化している。9月の島原半島西岸及び北山腹の水準測量では、全般的には前回の5月の結果同様沈降が続いている。9月の島原半島西部での距離測量によれば、従来同様収縮傾向が観測されている。地磁気については消磁傾向が続いている。二酸化硫黄の放出量は若干減少傾向にある。

このように、溶岩噴出量には減少傾向が見られるが、山頂部の地震活動や火砕流の発生は活発に続いており、総合的には火山活動は依然として活発な状態にあると考えられる。

以上のことから、規模の大きな火砕流も含め、今後も火山活動に厳重な警戒が必要である。

なお、降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。

平成 4 年 12 月 28 日
気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

雲仙岳における11月17日の航空写真測量によれば、8月上旬から11月中旬までの1日あたりの溶岩噴出量は約13万 m^3 と、昨年の半分以上に減少した。また、目視観測等によれば、その後の噴出量は日に5～10万 m^3 と推算されている。11月中旬までの噴出総量は1億2千万 m^3 に達した。

火砕流は引き続き発生しているが、11月中旬から頻度が日に数回程度に減少している。これは噴出量の低下を反映していると考えられる。11月の空中熱映像によれば山頂部火口付近の高温部の面積が以前に比べ縮小した。

しかし、12月3日頃から新たに第9ドームが成長を始め、また、山頂部の地震活動は引き続き活発である。震源は溶岩ドーム及びその直下に集中しており、特に変化は見られない。普賢岳北山腹及び南山腹における距離測定では、鈍化しつつも、依然として山頂部の膨脹傾向が続いている。また、一時鈍化しつつあった地磁気の変化が、8月頃から再び消磁傾向を示すようになり、山頂部の蓄熱を反映していると思われる。

このように、溶岩噴出量に低下傾向が見られ、このまま低下すれば、近い将来噴出が止まる可能性も考えられるが、火山内部の状態を示す地震や地磁気データは依然としてマグマの貫入が続いていることを示唆しており、また、消長を繰り返す火山活動の一般的な特徴を考慮すると、このまま火山活動が終息に向うかどうかは現時点では判断し難く、今後さらに観測・監視を続ける必要がある。

また、溶岩の噴出が低下もしくは停止しても、高温で不安定な溶岩ドームの崩落により、火砕流の発生が続くと考えられるので、引き続き厳重な警戒が必要である。

なお、降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。